

看護の力、会話の力

川名 典子（杏林大学医学部付属病院 精神看護専門看護師）

今回、東京女子医科大学看護学会学術集会において、看護の技について発言の機会をいただいたことに感謝している。この機会に会話の持つ力と、看護の中での会話の重要性をお伝えできればと思っている。

私は、内科で始まった看護師生活の中で、病を持った人々の精神的ケアに関心を持ち、その結果リエゾン精神看護師として現在に至っている。リエゾン精神看護としての理論枠組みとして精神力動論を欠くことはできない。この理論はフロイトの精神分析に始まり、その後自我機能や自我の発達、社会適応など幅広い理論が重層的に発達してきているので、1冊の本で理解できるものではないが、人の心理に対する深い洞察を与えてくれる。

しかし、理論的に人を理解することと、看護の臨床は同じではない。リエゾン精神看護師として仕事を始めた当初、某病院の精神科外来には、偉大な精神医学者である土居健郎先生はじめ、精神療法の達人が複数おられ、面接について学ぶことができた。ここで私が学んだのは、厳密な理論の上に立脚しながらも、理論を金科玉条のように信奉するカウンセリング技法というものではなく、職業人としての、人間対人間のかかわりであり、それがいかに人の成長発達に貢献できるかということであった。すなわち相手の言うことに耳を傾けると同時に、こちらが相手をどう理解し、どう思い、どう考えているかを伝えること、すなわちコミュニケーションが人の成長発達に不可欠で、それは医師・看護師・心理士等の役割によって患者—治療者関係にバリエーションがあるものの、根源的に一つの真理であると思われることである。

私たち看護師がしたい精神ケアは、病む人に寄り添って、たとえ死が近いとしても患者の持つ力、心身の自然治癒力を発揚できるようにすることではなかっただろうか。そのための方法として、看護の中で大切な行為の一つは、私たちがともすれば看過しがちな「自然な会話」ではないのだろうか。